

特別活動の指導法

教職課程科目/2単位/T授業

担当教員 登坂 学

■使用テキスト	原田恵理子(著),高橋知己(著),森山賢一(著),加々美肇(著) 『最新 特別活動論』(基礎基本シリーズ3)大学教育出版
◆参考テキスト	①文部科学省『高等学校学習指導要領解説 特別活動編』(平成21年12月) ②日本特別活動学会監修『新訂キーワードで拓く新しい特別活動—小学校・中学校・高等学校学習指導要領対応』東洋館出版社 ③その他,教科外活動・特別活動に関する図書 ※添削の過程において適宜別の資料を紹介することもある。

講義概要・一般目標

学校教育は教科指導を中心にしながら,それ以外にも子どもたちの自主的な活動がさまざまに展開され,それが子どもの成長発達にとって重要な役割を果たしてきました。これらは一括して課外活動とか教科外活動とも呼ばれたりしますが,今日では学習指導要領で「特別活動」として位置づけられています。

特別活動は,望ましい集団活動をとおして,よりよい生活や人間関係を築こうとする自主的・実践的な態度を育成することを目標とします。活動の領域は,中学校・高等学校では,学級会活動(ホームルーム活動),生徒会活動および学校行事からなります。ほかに,部活動も子どもの学校生活にとって重要な部分をなすもので,学習指導要領では特別活動に準じて指導に留意するよう求められています(小学校ではクラブ活動が特別活動の一領域として位置づけられています)。

特別活動は,教科や道徳,総合的な学習の時間と並んで学校の重要な活動領域ですが,子どもたちの自主的な活動を主とする領域であることから,教科等のようにあらかじめ指導すべき内容を定めることができません。それでも学校で行われる教育活動の一環ですから,指導に当たっては何らかの見通しが必要です。

本科目では,特別活動の意義および現状と課題について理解することをとおして,特別活動の指導についての見通しを得ることをねらいとします。

なお,特別活動の上記のような特質のため,学習指導要領では特別活動の目標と内容は骨子しか書かれていませんので,学習指導要領解説・特別活動編で補うことが不可欠です。あわせて,特別活動の実践事例(特別活動と銘打ったものでなくても,生徒指導や進路指導など,教科以外の取り組みについての実践事例が参考になる)を参照することが望まれます。

到達目標

- 1) 特別活動の意義と目的および教育課程におけるその位置づけについて理解している。
- 2) 特別活動の歴史と現状,問題と課題について理解している。
- 3) 特別活動の各分野のねらいと内容,方法について理解している。
- 4) 特別活動の充実・発展を図るための諸課題について理解し,その解決策を構想することができる。

評価方法

科目単位認定試験により評価。

学習指導

* テキスト各章の学習を通じて皆さんに考えていただきたいことを以下に示します。

第1章 人間形成と特別活動の教育的意義

この章のポイント

特別活動は、具体的な活動を行うものでありながら、教科指導のように形が定まっていないので、学校現場では必ずしも積極的に展開されない場合があります。しかし、特別活動は、望ましい集団活動を通して、個性を伸ばしたり、よりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的態度を育成したり、自己を生かす能力を身につけたりすることを目的とするものです。このような特質のゆえに、特別活動には教科指導とは異なる豊かな可能性が内包されています。ここでは、特別活動の意義と目的について、学習指導要領に即して理解します。

第2章 特別活動の歴史的変遷

この章のポイント

学校は子どもたちに教科を教えるために作られた施設ですが、そこに集まった子どもたちは1日中教科を学ぶだけでは飽き足りず、授業以外の時間に自分たちで自主的な活動を行うものです。わが国の学校でもそうした現象が見られましたが、戦前、これらは課外活動としてカリキュラム外の活動に位置づけられていました。戦後は課外における子どもたちの自主的な活動の意義が認識されたこともあって、正規の教育活動としてカリキュラム内に位置づけられることになりましたが、その位置づけは学習指導要領改訂のたびに変更され、曲折を経て現在の「特別活動」に至っています。その意味で「特別活動」は学習指導要領上の概念ですが、学習指導要領でこれがどのように名付けられるかはたんなる名称の問題ではなく、教科外活動をどうとらえるかという位置づけの変遷でもあったのです。ここでは、このような特別活動（一般的には教科外活動）の歴史的変遷について概略を学びます。なお、「特別活動」は教科外活動の一つのあり方であって、両者は同じものではありません。

第3章 特別活動の内容と目標

この章のポイント

特別活動は、具体的な活動を行うものでありながら、教科指導のように形が定まっていないので、学校現場では必ずしも積極的に展開されない場合があります。しかし特別活動は、望ましい集団活動を通して、個性を伸ばしたり、よりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的態度を育成したり、自己を生かす能力を身につけたりすることを目的とするものです。このような特質のゆえに、特別活動には教科指導とは異なる豊かな可能性が内包されています。ここでは、特別活動の意義と目的について、学習指導要領に即して理解します。

第4章 学級活動の実践

この章のポイント

特別活動は入学式・卒業式や運動会、修学旅行など1年のうちに数回しか行われなないイベント的活動や、生徒会活動のように比較的頻繁に行われるけれども必ずしも定期的とはいえない活動などからなり、活動のための時間配分も明確に定められていないのが普通です。その中であって、学級活動（ホームルーム活動）は唯一、年間授業時数が定められ、毎週定期的に行われることになっていますが、実際にはきちんと行われなないことが少なくありません。しかし、学級活動（ホームルーム活動）は、学級（ホームルーム）という、互いに顔見知りのメンバーが集団で生活したり学習したりする場で行われる活動であるだけに、望ましい集団活動をとおしてよりよい人間関係を築こうとする態度を育成するという特別活動の目標を達成するのにもっともふさわしい機会です。ただし、学級集団は子どもたち自身がみずからの意図で作ったものではありませんから、そこには様々な問題が内包されています。そうした問題を自分たちで解決し、自分たちにとって居心地のよい学級を実現しようとする取り組みをとおして、個々の子どもたちの人間的な成長が促されるのであり、ここに学級活動（ホームルーム活動）の意義があります。ここではこのような学級活動（ホームルーム活動）の意義について理解し、有意義な学級活動（ホームルーム活動）を展開するにはどうしたらよいかを考えます。

第5章 生徒会活動の実践

この章のポイント

児童会・生徒会活動は、学校全体を舞台とし、また対象として、そこでの集団活動をとおしてよりよい人間関係を築こうとする自主的、実践的態度を育成することを目的とします。学級活動（ホームルーム活動）では、互いに顔見知りのメンバーが自分たちにとって居心地のよい学級を実現しようとする取り組みをとおして、人間的な成長が促されることがねらいとされるのに対して、児童会・生徒会活動は、比較的匿名性が高い（互いに顔見知りではない）学校を舞台とし対象として取り組む活動である点に、大きな特徴があります。互いによく知らない者どうしでありながら同じ学校の一員としてよりよい学校生活を実現するために協力しあうという児童会・生徒会活動の取り組みの経験は、将来、一人の市民として、互いに見知らぬ人びとからなる社会に対して責任を負う市民性を育むうえでとても意義のあることです。しかし、児童会・生徒会では、この匿名性のゆえに、役員会と一般メンバーとが乖離し、児童会・生徒会を自分たちのものと意識しない子どもたちも少なくありません。このような状況を反映して、児童会・生徒会役員会が学校の下請け機関と化して一般のメンバーと対立するようなことさえあります。ここでは、こうした児童会・生徒会活動の意義を理解し、児童会・生徒会活動をめぐる現状と問題、その克服のための課題について、考えます。

第6章 学校行事の実践

この章のポイント

年間をとおしてたびたび行われる学校行事は、子どもたちの学校生活にメリハリを与えたり、節目ごとに自分の成長を振り返らせたりする大切な活動です。学校行事には、子どもたちの視野を広げたり、日頃とは異なる活動のなかで自分や仲間の新しい面を発見したり、あるいは子どもどうし、子どもと教師の関係が組み直されるきっかけになったりするなど、豊かな教育の機会が内包されています。しかし、わが国の学校では明治以来、儀式が重視され、国家が期待する人間像を子どもたちに植えつけるための機会として儀式が多用されてきたという歴史があります。戦後になって、そのような儀式の位置づけが根本から改められたとは必ずしもいえません。ここでは、具体的事例から学校行事の意義を理解するとともに、こうした歴史的経緯をも踏まえて、望ましい行事を展開するにはどうしたらよいかを考えます。

第7章 特別活動を進めるための指導計画

この章のポイント

特別活動の目標は、特別活動の核活動・学校行事の実践的な活動を通して達成されます。その指導計画は、学校の教育目標を達成する上でも重要な役割を果たします。調和のとれた特別活動の全体計画と各活動・学校行事の年間指導計画を全教師の協力の下で作成することが大切です。ここでは計画書の作成をするうえで大切な点を具体的に学んでいきます。この場合も学習指導要領が根底にあることを忘れないようにしなくてはなりません。

第8章 特別活動の評価

この章のポイント

教育活動に評価は不可欠ですが、集団での活動が主体となる特別活動においては、それゆえの評価の難しさがあり、また工夫が必要となります。なぜ評価が困難なのかを正確に認識したうえで、評価の方法の一例として「パフォーマンス評価」について理解を深め、実際の教学に活用できるようにしましょう。

第9章 人間形成を支える諸原理

この章のポイント

子どもたちは集団生活の中で様々なことを学びながら成長発達していきます。しかし現代の子どもたちは生活習慣の確立が不十分で、自制心や規範意識が低下の傾向にあるとされています。また、友だちや仲間との関係について悩む子が増加し、対人関係の形成や維持が困難で苦手になり、自分に対して自信が持てず否定的になったり、将来に対して無気力・不安を抱えたりしている子どもも大勢います。ここで重要なのが集団経験の中における「個」の発達です。この点を的確に指導するための前提として教師にはどのような見識が必要なのでしょう。ここでは教育心理学関連の科目でも学んだエリクソンの「発達段階」の理論を中心に復習します。

第10章 特別活動の新たな展開

この章のポイント

私たちが暮らす社会は急激な情報化とグローバル化により、新しい技術や多様性のある文化を受け入れていくことが求められています。学校現場でも様々な変化の波にさらされ、学校における集団活動の重要性はますます増えています。教室には多様な文化的背景を持つ子どもたちが共に学び、多文化的な社会へと卒業していきます。そのような中、自他を認め合う人間関係を築きコミュニケーション能力を高め、自己の生き方を考えて自己を生かす能力を養い、多様な他者と共存できるグローバルな市民性を育成するためには、特別活動の果たす役割は大きいと言えます。そのためのキーワードとして、「多文化共生教育」、「アクティブ・ラーニング」、「ICT教育」、「予防的・開発的教育」の概念及び方法を学び、実際の教学に活用することができるように準備します。